

郷土博物館・文学館だより



渋谷宮益町沽券絵図 延享元年（1744）



企画展

絵図・地図で読み解く渋谷 開催中！

当館では渋谷に関する絵図・地図等の資料を多数所蔵しています。今回の企画展では、その中から当館初公開「渋谷宮益町沽券絵図」などを含む22点を展示しています。

絵図・地図を漫然と見ていると、そこに描かれている渋谷の特徴などは、なかなか気づきにくいかもしれません。今回の展示では、絵図・地図資料とともに、それぞれの絵図・地図の見どころをとりあげ、パネルで紹介しています。

渋谷を描いた絵図・地図の魅力をぜひお楽しみください。



2月22日に行われた展示解説

第 18 回オリンピック東京大会と道路整備

昨年の9月8日、平成32年(2020)のオリンピック・パラリンピックの開催都市が東京に決定しました。開催が決まった時の歓声や喜びに満ちた笑顔はまだ記憶に新しく、この決定で日本中が盛り上がりました。今年の1月には競技大会組織委員会も組織され、いよいよ大会の準備が動き出しています。

さて前回の東京オリンピックは、今からちょうど50年前の昭和39年(1964)10月10日に、開会式が挙行されました。この時からもう半世紀が経過したことを感慨深く思われる方も多いかもしれません。当時、日本は高度成長期にあり、各地で街並みが大きく変わってゆきました。特に東京ではオリンピックの開催によって、風景が大きく変わった時期でもありました。

オリンピックを開催するには、選手たちが活躍する場所、すなわち競技場が必要不可欠です。そのため大会に合わせて、急ピッチで多くの競技場が建設・準備されました。現在、渋谷区内には、大会の会場として使用された現・国立代々木競技場や渋谷公会堂などが現存しています。東京体育館も会場でしたが、1990年(平成2)に、現在の建物にリニューアルされました。

また現・都立代々木公園の場所には、大会の開催期間中、選手村があり、返還された旧ワシントンハイツの建物が宿舎として使用されました。

オリンピックでは、このような施設のほかに、選手はもとより競技を観戦する観客の人たちをスムーズに移動させるため、道路や交通手段の

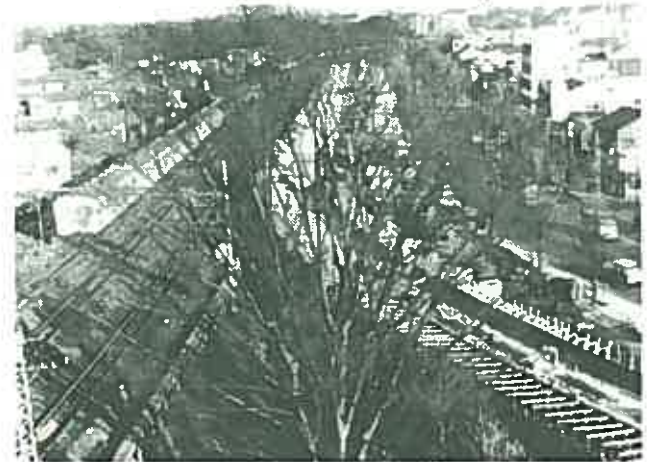
整備が必須でした。

渋谷区内でも、道路の新設や既存道路の拡幅工事などが相次ぎ、主要道路では、首都高速道路3・4号の建設や国道246号(青山通り、六本木通り、玉川通り)の拡幅・整備などが行われました。

また代々木に設置された選手村周辺も、道路工事が行われました。原宿駅にある五輪橋から山手通り(環状6号線)にぬける放射第23号線、代々木の西参道から現・代々木公園の西側を通り、区役所・国立代々木競技場をめぐる補助線街路第53・155号線などの道路も、この時期に整備されたものです。

同時にマラソンのコースとなった甲州街道をはじめ、都・区道も舗装改良がなされました。区道の舗装率は、オリンピックの翌年、昭和40年には99.4%に達成していたそうです。

6年後に、東京ベイエリアを中心にオリンピックが開催されます。これに向けて競技場や道路、交通などの建設・整備がさらに進みます。大会の開会式までに東京、そして渋谷は、また大きくその姿を変えることでしょう。



昭和37年 建設中の首都高速道路4号



千駄ヶ谷に暮らした村上春樹

アメリカ文学から影響を受けた文体で都会生活を描き、『ノルウェイの森』や『羊をめぐる冒険』『海辺のカフカ』『IQ 84』などのベストセラー作家として知られる村上春樹は、昭和24年（1949）に京都で生まれました。

千駄ヶ谷は、村上ゆかりの場所です。JR千駄ヶ谷駅の改札を出て横断歩道を渡り、東京体育館の前の道を行くと、鳩森八幡神社の五叉路にあたります。その手前のビルの2階には、かつて村上の経営していたジャス喫茶「ピーターキャット」がありました。ピーターキャットは、もともと国分寺で開業していましたが、昭和52年に千駄ヶ谷に移転しました。また、このビルの隣にある不動産屋は、村上が住んでいたアパート「プリンス・ピラ」の大家さんでした。デビュー作で群像新入文学賞を受賞した『風の歌を聴け』はこの地で書かれた作品です。

村上のエッセイ集『村上朝日堂』には、千駄ヶ谷でのエピソードがいくつか紹介されています。鳩森八幡神社の五叉路を右折すると、村上が通った床屋があります。本書には「月に二回片道二時間かけて千駄ヶ谷の床屋まで行く」と書かれており、昭和56年に千駄ヶ谷を離れた後、この床屋に通っていたことがわかります。

このほか、ラーメン屋も登場します。

千駄ヶ谷に住んでいた時分、僕の家近くのキラー通りに美味しいという評判のラーメン屋が二軒並んであって、その前を通ると嫌いなラーメンの匂いがふんふんするので、

僕は家に帰るのにいつも大変苦勞をした。

このほか、千駄ヶ谷に住んでいた時の大晦日の過ごし方として、夕方歩いて六本木まで行き、狸穴そばを食べ、新宿で酒を飲み、原宿の東郷神社でおみくじを引き、鳩森神社でお神酒をいただいて帰ったことなどが書かれています。

本書の中には、千駄ヶ谷以外の渋谷に関する描写もあります。たとえば、地下鉄銀座線が渋谷駅に到着する寸前に、一、二秒電灯が消えて車内が真っ暗になることをあげ「僕が一番びっくりしたことは、他の乗客が毛ほども驚いたり、怯えたり、動揺したりしていないことだった。……東京の人ってタフでクールなんだなあ、とつくづく感心した」と述べています。

ところで、村上の小説『アフターダーク』の冒頭にも、渋谷がモデルと思われる風景が出てきます。

色とりどりのネオンの海だ。繁華街と呼ばれる地域。ビルの壁面に取り付けられたいくつもの巨大なデジタル・スクリーンは真夜中を境に沈黙に入るが、店頭のスピーカーはまだヒップホップ・ミュージックの誇張された低音をひるむことなくたたき出している。



『村上朝日堂』 昭和62年 新潮社

収蔵資料紹介

千石通し(せんごくどおし)



今回ご紹介する資料は、かつて渋谷区内で使用されていた稲作に関する資料です。稲を収穫し、食べるためには、脱穀と調製が必要です。そのため、まず「干歯扱き(せんばこぎ)」などを使い脱穀し、穂の部分だけを取りまします。続いて穂の籾(もみ)を取るために、「籾すり臼(うす)」という臼に入れます。この臼は、研磨面に木製の歯が付けられており、臼を回転させることで籾をすり落とすことができます。

千石通しの使用法は、まず上部の受入口から脱穀して、籾をすり落としたり米を入れます。すると、金網状の斜面を転がり落ちながら、糠(ぬか)や小さい粒の小米はすぐに金網を抜けて手前に落ち、玄米は最後に落ちるというように、選別されます。千石通しが作られるまでは、この作業は何種類もの目の大きさの違う篩(ふるい)にかけて行っており、大変な手間がかかっていました。貞享年間(一六八四〜八八)頃に、江戸小石川の釘屋喜兵衛が千石通しを考案したことで、負担が大きく軽減されました。千石通しは、「千石篩」とも書き、従来の篩に比べ、数倍も効率が良く、一度に千石もの米をふるい分けることができるとして、名づけられたといわれます。

【開催中の展示】

企画展「絵図・地図で読み解く渋谷」展

平成26年3月23日(日)まで

【開催予定の展示】

企画展「渋谷現代短歌優秀作品展」

平成26年4月1日(火)～4月13日(日)

*第14回渋谷現代短歌の優秀作品を展示します。

企画展「新収蔵資料展」

平成26年4月19日(土)～6月1日(日)

*平成25年度に新たに収蔵した資料を展示します。

白根記念

渋谷区郷土博物館・文学館

SHIBUYA FOLK AND LITERARY SHIRANE MEMORIAL MUSEUM

開館時間 ◆9:00～17:00 (入館は16:30まで)

※震災に伴う節電を継続し、開館時間を13:00からに変更しています。詳細については、お問合せください。

休館日 ◆月曜日(休日の場合はその直後の平日)・年末年始

入館料 ◆一般:100円(80円) 小中学生:50円(40円)

※1. 10名以上は団体料金
※2. 60歳以上の高齢者(有料)は半額

お問合わせ ◆東京都渋谷区東1丁目9-1 TEL:03-3486-2791

郷土博物館・文学館だより vol.25
平成26年3月10日発行